

公開イベント「変容する国際安全保障と核兵器」の開催結果について

1 要旨・目的

核兵器への依存が高まる中、深刻化する国際安全保障環境に対する理解を深めるため、各地域から専門家を招いて公開イベントを開催した。

2 現状・経緯

へいわ創造機構ひろしま（略称 HOPe）は、核抑止に頼らない安全保障研究を進めている。

昨今の厳しい安全保障環境下において、県民に対して、核兵器を取り巻く安全保障の課題をより深く理解してもらうための機会を提供し、核兵器のない世界の実現に向けた具体的な貢献につなげていくための契機とする。

3 概要

(1) 開催主体

へいわ創造機構ひろしま

（構成：広島県、広島県市長会、広島経済同友会、広島大学ほか 計 20 団体）

(2) 開催日時

令和 6 年 6 月 16 日（日）13:30～16:00

(3) 場所

広島国際会議場（広島市中区中島町 1－5）

※併せてオンラインでライブ配信

(4) 実施内容

ア テーマ

変容する国際安全保障と核兵器

イ 構成

○ 開会あいさつ 湯崎 英彦 広島県知事、へいわ創造機構ひろしま代表

○ セッション

〔テーマ〕

セッション 1 世界と地域の安全保障の関わりと、核兵器との関係

セッション 2 現在の国際情勢における被爆地と日本の役割

○ 閉会

ウ 登壇者

モデレーター：秋山 信将 一橋大学国際・公共政策大学院 教授

パネリスト：

・マルコム・チャーマーズ 英国王立防衛安全保障研究所 副所長

・イブラヒム・フライハト ドーハ大学院研究所 准教授

・岩間陽子 政策研究大学院大学 教授

・マンプリート・セティ

印空軍力研究センター（CAPS） 特別フェロー/

核軍縮・不拡散アジア太平洋リーダーシップ・ネットワーク（APLN）

上級研究アドバイザー

(5) 参加者

70 名（会場参加 31 名、オンライン参加 39 名）

(6) 主な発言

ア 開会あいさつ

逆境の中ではあるが、安全保障の現状や懸念を理解した上で、核兵器のない世界に向けて私達に何ができるのか、一緒に考えていきたい。



開会あいさつ

イ セッション1「世界と地域の安全保障の関わりと、核兵器との関係」

- ヨーロッパや中東、南アジア、東アジアにおける安全保障の力学は、核兵器の拡散あるいは核兵器のリスクの高まりと密接に関わっている。また、各地域において、核兵器の存在が地域安全保障のあり方を規定している側面がある。
- 日本と米国のように従来の安全保障の枠組は、2 国間関係が中心だったが、横のネットワークとして、日米韓、クアッド（QUAD）等が活性化してきている。
- 多くの国が、核保有国への対応に苦慮する中で、自国の戦略について考えていかねばならない状況に置かれている。
- 核兵器使用の一番大きな可能性は、抑止力の名の下に危険な戦略をとる以上、意図的なものではなく、誤算や誤認によるものになるだろう。
- 中東における秩序が、米国一極から多極化し、流動化する中で、イスラエルに核保有を許している状況が、地域に様々な負の影響をもたらしている。中東における軍拡を止めるには、非核化と紛争の解決しかない。
- 70 年以上、核兵器は持っていたけれども、使われなかったということは、核兵器は、政治的な価値はあったけれども、軍事的な価値は無かったということである。軍事的な価値が無いのなら、政治的な価値も低下していくのではないか。



セッション 1

ウ セッション2「現在の国際情勢における被爆地と日本の役割」

- 核兵器の持つ意味合いを、全ての核保有国の指導者が理解する必要がある。核兵器の使用は許されない。世界で、被爆の記憶が、どんどん薄れる中、指導者が被爆者に会って、経験について話を聞くことは、被爆者の傷を、繰り返し何度も痛めることになると思うが、ここに広島・長崎の役割があると思う。
- 現在、核兵器を使用してはいけないという強い規範があることは、国際政治上、決して、小さなことではない。プーチン大統領が、核兵器を簡単に使えない理由の一つは、世界中から非難されるためであり、この規範の価値は決して小さくはない。それを強めていくことが日本の役割でもある。
- 日本自身が、非常に強い反核世論を持っており、簡単には、核兵器国にならないだろうということが、アジアの安定化、不拡散体制及び今後努力すべき軍備管理・軍縮において、リーダーシップを取る上での重要な要素になっている。

- 誰もが広島に来ることはできないだろうが、
広島経験は、世界の隅々に伝わるべきものだ。
政治家が、核兵器とは何なのかを十分理解してい
ない中で政治をしている。ソーシャルメディアを
駆使して、被爆の記憶をよみがえらせ、世界の静
寂を打ち破るべきだ。



セッション 2

- 日本が、核兵器国と非核兵器国の橋渡しになる
と抽象的に言うのは簡単である。しかしながら、
これから、アジアにおける軍縮の過程で、査察の必要性
が出てくるが、人材を提供できなければ、大きな役割を果たすことはできない。日本は、
原子力の知識を持った専門家集団を引き続き育てて行く必要がある。
- 世界が多極化し、米国の力が相対的に低下し、中国の力が大きくなっていく中で、日本、
英国、ドイツ、インドといったミドルパワーが果たす役割が、国際的な重みを持つよう
になっている。
- 日本が果たしている重要な役割は、現在の核による抑止を、このままを続けることはで
きない、それ以外の方法を探らなければならないということを、世界に教えていることだ。
多国間で軍縮を行っていかなければならないことを伝え、核兵器を持たない日本が重要な
役割を果たすことができるというメッセージを出し続けることが大切だ。冷戦終結後、そ
うした役割は、ある程度果たされている。